

# 朝鮮軍記大全

和書門		
二八〇四	函	架
一五	冊	架

和書		
二八〇四	冊	架
一五	冊	架

內閣文庫	
番號	和 28004
冊數	15 ( 9 )
函號	168 92

廿世  
四一



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



朝鮮軍記大全目錄

卷之九

小西行長請和事

沈惟敬謀和駐於行長事

日本諸將退王城事

大明勢入替王城事

卷之九

大明兵將逐小西事

朝鮮軍記大全目錄

明治二十三年



華魚全言フシテフニフニ金

大明兩使來日本事

朝鮮王子作詩事

日本軍兵重渡海事

日本前孫皇王故事

新對海嶽山嶽事

小西行身事

卷之六

朝鮮軍記大全目錄

朝鮮軍記大全目錄

卷之六三

朝鮮軍兵欲救晉州事

晉州城合戰事

清正作轡韞車事

卷之六四

沈惟敬再議和睦事

大明諸將還西事

朝鮮軍記大全卷之六三目錄

黒田淺野等異見事

朝鮮王還王城并大明改經略使

事

長五折海軍

晉州城合衆

陳翰軍共意

參之六三

陳翰軍記大全目錄

朝鮮軍記大全卷之二十一

小西行長請和事

爰ニ金千鎰カ陣中ニ李蓋忠ト云フ者アリ千鎰ニ

請ヒ求メテ自テ京城ニ至リ日本ノ將ノ情ヲ探リ候

ツテニ主子ナラビニ長溪君黃廷或等ニ見ユルコト

ヲ得テ歸ラント云ヒタルヲ千鎰モ其意ニ任セテ遣

シケルカ程ナク千鎰カ陣中ニカヘリテ日本ノ諸將承

陣ヲ張レルニ各々退屈シテ媾和ノ意ヲ懷カヌ者モナ

ニト告クル折カラ。程ナク日本ノ諸將ヨリ龍山ノ西江ニ

舟ヲ留ル忠清ノ水使丁傑京幾水使李質等ガ方ヘ

書ヲ贈ルヲ倡義使官金千鎰ガ方ヨリ柳成龍ニ達

レケル。即和將小西等カ和睦ヲ求ムルノ書ナリケリ  
 成龍コレヲ見熟ク思ヒ回ラスニ李如松提督更ニ戰ノ  
 意ナキウヘハ。免ニモ角ニモ日本ノ兵軍ヲ退ケシ我  
 國ノ安堵ヲ得ルニハ如ヘカラス然ルニ此書ヲ彼ニ見  
 セニ李如松モ定テ開城府ニ還リ此議ヲ取リハカル  
 決定セリト思案スレバ乃チ其書ヲ以テ明副總官查  
 大受ニ示シケリ。查大受即刻家ノ軍官李慶ト云ヘル  
 者ヲ使トシ馬ヲ馳テ平壤ニ報セシム。於是李提督  
 モ此議ヲ欲シケル故。沉遊擊惟敬ヲシテ開城府ニ  
 來ラシメテ和睦ノ事ヲ取リ行ハシメントシタリケル  
 金命元ハ沉惟敬ニ向ヒ日本ノ諸將凡汝ガ爲ニ平

壤ニシテ欺カレタルヲ以テ。必ス不善ノ意ヲ狹ニ  
 ニ恨ヲ報ユトセン。實ニ危キ所ヲ侵シテ更ニ何ゾ入  
 ヘキヤ。思案アリテ善ルベキカト異見セシヲ。惟敬  
 ハ聞テ倭人モト速ニ退ヘキノ約束ナルニ彼退カズ  
 テ難ニ逢タリ敗タルハ自ラノ敗ナルニ我何ゾ預ラシ  
 ヤト云ツテ遂ニ倭軍ノ中ニ入タリケル

沉惟敬謀和睦於行長事  
 沉惟敬其ヨリ小西カ陳所ニ行テ和睦ノ議定ヲナ  
 シタリケル。先立テ相約スル處ノ箇條七ナリ。其三  
 ハ兩國和議ノ度ニ日本ステニ攻メ取ル處ノ朝  
 鮮國ノ道尚忠滿ヲ其儘ニシテ日本へ領知スヘキノ

度第三ニハ朝鮮ヨリノ入貢前代ノ如ク毎年コレヲ  
日本ニ贈ルベキノ度第四ニハ明帝ヨリ秀吉ヲ封シテ  
日本國王ニ封シヌベキ等ノ度ナリ。其外ノ三箇条ハ深  
ク是ヲ秘セシニ依リ。其砌コレヲ知モノナシ。然ルレ今  
度右ノ七箇条日本國ヨリ望ノ如ナラバ朝鮮ノ二  
王子ナラビニ臣トシ從フ處ノ囚ニテ盡ク歸國セ  
シメ且ヘ王城ニアル處ノ日本勢ヲバ皆先ツ金山浦  
ニ退ケテ歸朝セシムベシ。然ラバ李如松モ亦是兵ヲ太  
明ニ退ケテモノナリト定メケル。増田石田大谷等三奉  
行ニテ朝鮮國ノ在陣辛勞ノ度ナレハ何ヤウ左和議  
ヲ調ヘテ日本ニ面ラシメ意シキリナル故。大閣ヲ大明

王ニ封スベシト云ヘルノ一箇条ニ於テ。日本王ニ封  
スト云ヘルヲ大明ノ王ニ封スベキト云ヘルト。ウザト  
コレヲ聞アヤマツテ日本ニハ大明王ニ封スル旨ナリ  
ト云ヒヤリケルガ。相違アレバ大閣ノ意ニ不叶ユ。再  
ニ戰ノコトハ起リケル。行長モトヨリ和議ヲハカルノ  
張本タリト雖。先立テ平壤ノ軍ノ戰ニハ惟敬ガ  
李如松ニ内通モナセリヤト疑フテ大ニ是ヲ昔ハズ  
再三ニシテ後行長モ然ラバ約束ヲナサント請ニ  
ヨリ。李如松モ亦再ヒ開城ニ還リ來ルナリ。柳成  
龍等朝鮮ノ諸臣ハ和好ヲナスノ良計ニアラザ  
ル度ヲ理ヲ極メテ論シ。夕ニ敵ノ急リニヨツテ

明洋軍已入全三十一

撃ニハ不知ト云フヲ李如松ハ此ヲ承ケ我心ノ欲スルト  
 コロモ同シク撃ニアリトハ雖モ内意遂ニ聽用ユルノ意  
 ナレ又重テ遊撃將軍周弘謨ト云者ヲ日本ノ陳宮小  
 西ガ方ヘ往シメ跡和好ノ堅カラシ度ヲ取ハカル沉惟敬ハ小  
 西等カ疑心アルヲ察スレバ密ニ右司馬ガ方ヘ議シ計  
 リ監生徐一貫生員謝用梓ノ二人ヲ行長ガ所ニ使トシ  
 多ノ金帛ヲ遣シテ和談ノ度ヲナサシムル又長盛ニ成  
 吉隆ガ輩モ皆清正ト其中不和ナルニヨリ清正ガ朝鮮  
 ノ王子ヲ生捕其功ノ拔郡ナルヲ拜サセ手抵ヲ空フセ  
 ント思フガ故共ニ其議ヲ同心シテ議ヲナシテ云ケル軍  
 中ノ糧米漸ク竭キ諸手ノ士卒ハ瘡疾ニカ、リ。馬亦乏

フヤムテ斃ル、度最多シカハルトキ大明ノ大軍襲  
 ヒ來ラハ其禍ヒ少カラシ依茲テ一先金山浦ニテ  
 軍ヲ退ケテ和議ノ調ヲ待ント云フ。沉惟敬此ノ沙汰ヲ  
 聞クヨリ弥以テ小西ヲス、メテ和セヨト云フ小西聞テ王  
 子ヲ送リ返ラシムル度ハ太閣ヘ申サズシテハ叶フベカ  
 ラズ。兵ヲ引テ金山浦ニ班サン度ハ三奉行ト相計リテ  
 其意ニ叶フベキ者ナランカト領掌シ此旨ヲ諸將ト共  
 ニ評スルニ長々ノ在陣ナレハ誰レカ一人嫌フベキ各々是  
 ニ同心セリ李如松モ曾ヨリ此議ヲ早ク調ヘ危キ場所  
 フ立サラント思フニヨリ。遊撃戚金錢同ク世禎二人  
 ノ者ヲ使者トシ東坡驛ニ至ラシメ柳成龍金元帥

觀察使李廷馨ヲ招テ各坐ヲ同シ日本ノ和談既ニ  
調ヒ王子倍臣ヲ此方へ返シ軍兵ヲ退テ京城ヲ還  
シ去ラント云ヘルニ付キ。天朝ヨリモ此議ヲ許容ス  
ルベキノ趣アリト聞ヘタリ。併テ李提督ハ此事ヲ全  
クハ肯玉ハス。一旦倭兵ヲ給テ城ヲ出シ其後計ヲ  
定メテ是ヲ追討セントノ趣キナリ各々ハ何ト思ヒ至  
フソト相談ガマシク云ヒ出タルハ是李提督ガ意トシ  
朝鮮ノ者凡ノ意ヲハカリ看ニ爲ナリサレ凡朝鮮ノ  
諸臣凡ハ曾ヨリ欲セヌ事故ニ堅ク是ヲ争ヒ惟ニ  
倭兵ノ懈怠ヲ幸ニ押寄セテ是ヲ討伐アラシム本  
望ナレト一向ニ和睦ノ意ヲバ肯ハヌヲ世禎モトヨリ

其性躁レク氣ノ短カキ男ナレバ怒ヲ發シテ大ニ柳  
成龍等ヲ罵リテ然ラバ爾ガ國王何ニハニ城ヲ奪テ  
艱難スルノサホドノ強氣アルナラバ能ク戦フベキ度  
ナルニトセリカケテ云ヒケルトキ成龍少モ躁カス言  
ヲ徐メテ時ヲ計リ國ヲ遷シ而シテ存センコトヲ圖ル  
モ亦一ノ道アリ今天朝ノガニヨツテ先度ノ耻辱ヲ  
洗フ爲ノ度ナリト云フ威金錢ハ微レク笑ノミニシテ  
其座ヲ立テ回リシガ同四月十九日ニハ李提督大軍  
ヲ領シテ東坡驛ニテ陣營ヲ遷シ來リ。查總兵ガ幕  
中ニ其夜ハ同宿シタリケリ日本増田小西等ノ諸將  
當月廿日ヲ以テ兵ヲ退シト約束ヲ定ムル故日本ノ諸



將王城ヲ啓キナハ入リ替ランヲ爲ナリケリト聞ヘク  
日本諸將退王城事

同四月二十日或二十一日日本ノ諸大將王城ヲ退クヘ  
キニ決定セリ。始ヨリノ約束ニ日本勢王城ヲ啓キ立去  
ル日ハ明大將李如松モ同ク開城府ヲ立退ヘキノ定メ  
ナルヲ還テ東坡驛ニテ大軍ノ引テ來ルト云フニモ意  
ヲ付ス何人仔細ヲ述ルニモ及ハスレテ一日ナリ王城  
ヲ引キ除フベキニ定タリ。日本人去年ヨリ王城ニ在陳  
スレバ朝鮮ノ町人百姓モ立カヘツテ。何トナク商買耕  
作スルモノ日本人ヨリ多カリケリ。此ニヨリ増由等コノ  
事ヲ謀リテ曰彼等若シ潛ニ明兵ト内通シテ我々ノ

往ヘキ路スレテ塞キ障ルモノナラバ金山浦ニテ師ヲ  
班スニ難カラシム。ガリトテ商賈農工ノ者ニテヲ盡ク追  
拂テ軍ヲ退シハ縱ヘバ何如ホトニ追ヒ除フトモ亦群  
ヲ歸リテ障ン返テコレハ追ウタザルニハ劣リナルヘシ。  
若シ亦カレ等ヲ一所ニ招キ集メテ悉ク殺シ盡シテ退  
シト思ヘバ彼が輩又何ノ罪カアル。實ニ是ハ忍ビザルノ  
第一ナリナント評議スルニ區々ニシテ諸將ノ量見更ニ  
一決セサリシニ小早川隆景一人ハ傍ニ高枕シテ斷々  
ラケニ打臥テ一言ヲモ出サシレバ石田三成高聲ニ是ヲ  
呼ニテ諸將ノ詮議如此ニシテ何レ評議ノ定ムラザル  
ヲ足下ハ何ゾ知ラザル体ニ頓シ低テ眠テルヤ合点メ

月洋軍紀大卷之三

往ザル仕方カナ。今日ノ評判ハ何モナカラモ。上リテ  
ケテ大事ナリ。子ガハクハ老功ノ誨ヲモ受ケ申サシヨト  
一座中ノ望ミナリト云ヒケレハ。隆景ハ其時ニヤワシクニ  
寢眼スツテ起ナフリ。諸將達ノサキヨリ論シ玉フ所ヲ聞  
クニ皆々非ナルコト少モアラヌ吾メレニ益ナキ時ヲ費  
ニヤ然レモ各々ノ尋玉フ上ナレバ。一量見申シテ是ン今  
諸將ノ召遣ハル、下々ノ中ヲ吟味セバ朝鮮ノ者モ其  
半ニアルベシ其止彼等ハ此方ヲ見知レモ此方ヨリハ  
カレラヲ見知ル莫ナシ。町人百姓ヲ氣遣ヒテ追ヒ拂ハ  
ト思ニ玉ハ。其ヨリハ先ツ此者モ去リナシカ。係テ是モ又  
長途ノ人歩荷物ヲ運ニ事關テハ叶フマシ唯明白コ

ノ城ヲ引トラバ早天ニ撃立テ面々ノ役所々々ニ火ヲ  
カケ。其煙ハ一キレノ中ヨリサラクト引取ルベシタト  
へ明人が後ヲシタイテ喰ト、メント欲スルモ跡シタフ  
コトハ叶フマシト云ヒケルヲ。一座ノ諸將一同ニ是ニ過  
タル手段ハアラフジト詮議ハ爰ニ終リケリ。斯テ其夜モ  
曉方ニナリシカバ。諸大將ノ役所々々ニ取り定メタル  
王城ノ宮室へ其モヨリクニ隨ヒ一度ニ火ヲ放キ煙ノ  
ニギレヨリ馬ノリ出シ備ヲ繰リ出シ引除フハ古ノ漢  
楚兵ヲ合シテ秦ノ都ニ打入り。咸陽宮ニ火ヲ懸シ  
其類ニモアリヌベシ。冷ニシカリシ事ナリケル。

大明勢入替王城事

明神宗紀卷之三十一

四月廿一日或二朝鮮ノ王城ニハ大明ノ大兵入替リ  
 李提督ハ小公主ノ宅後南別宮ト云ラニ旅館ヲカニス從此前  
 一日先立テ日本ノ軍兵既ニ城ヲ明ケ退キタリ爰  
 ニ柳成龍ハ李如松ガ後ニ隨テ王城ニ入りテ見テア  
 レバ城内ニ殘リ止ニル民トモ百ニシテ其一分ヲ夕ニ  
 止ニラズ偶存スル者ト云ヘドモ飢餓レタル者凡ノ  
 面色ハ七トハ三鬼ノ如ク疲レ黒ニテ目モアテラレ  
 スアリサニナリ。時ステニケシカラズ日于リシテ天  
 氣烘カ如ク疫癘サカリニハヤリケレハ人死馬死  
 シタル其數擧テ盡サレズ處々ニ暴露レバ臭穢ノ  
 甚シキコト城中ニ滿々テ行人鼻ヲ掩ハスト云フモ

ナシ過グル處ノ公所私所人家一宇モ殘ラズ燒盡  
 サル纔ニ崇禮門ヨリ以東南山下ニ至リ帶ノ如クニ  
 處々ノ舎ノ殘ルナリ宗廟三ノ闕門並ニ鐘樓司院ニ  
 學館ノ大街ヨリ以北ニアルモノハ唯ニ其餘燼ヲ見ル  
 ノミナリ朝鮮ノ諸臣ノ提督ニ隨テ王城ニ入ル者ソレヨ  
 リモ意々ニ宗社ヲ拜シ淚ヲナカサヌ者ハナシ柳成龍  
 ハ宗廟ヲ拜シヤミ其ヨリ李提督ガ旅館ニ至リソノ  
 機嫌ヲ窺ヒ且又日本ノ兵軍纔ニ退キ去リタリト  
 雖此ニ未タ遠カルベカラス將軍願ハ軍ヲ發シテ  
 急カニ追討チテ後ヨリ迫リ玉ヘト云ヘハ提督我  
 カ思フ處モ爰ニ有ナク急ニ追ハサル所以ノモ

ソハ漢江ニ船ヲキヲ以テナリト道レコトバヲツ  
クリケル。信ヤクハ漢江ノ水ハ東ニ流ルベシト云フ  
事也。又漢江ノ水ハ西ニ流ルベシト云フ事也。又  
漢江ノ水ハ南ニ流ルベシト云フ事也。又漢江ノ水  
ハ北ニ流ルベシト云フ事也。又漢江ノ水ハ東ニ  
流ルベシト云フ事也。又漢江ノ水ハ西ニ流ルベ  
シト云フ事也。又漢江ノ水ハ南ニ流ルベシト云  
フ事也。又漢江ノ水ハ北ニ流ルベシト云フ事也。  
朝鮮軍記大全二十一終

朝鮮軍記大全卷之二十一自文祿二年五月至同六月

大明兵將逐小西事

柳成龍ハ李如松ニ向テ。將軍賊ヲ追ント夕ニ思召ハ。  
某先立テ江邊ニ出テ舟艦ヲ備ヘ申サント云ハ李  
如松是ヲ聞キ甚以テ善ト云フヨリ成龍ハ急キ漢  
江ノ邊ニ出タリケリ。是ヨリ先キ行文ヲ以テ京畿右  
監司成泳水使李蘋ニ令ヲナシ。日本勢ノ去レル後急  
カニ江中大小ノ船ドモヲ失フコト無シテ。俱ニ漢江ニ  
會セヨト云フ是時江船ノ到リ集ルモノ八十艘ト聞  
ヘタリ。早ク使ヲ李提督カ方ニ遣シ。漢江ノ船ステス  
辨シタリト告タリケレバ。食頃ノ間ニ明軍將李

如栢ハ二万余ヲ兵ヲ率ヒテ江上ヲ出來レ即軍士半モ  
渡ラント思フトキ日既ニ暮ニ向フ處如栢ハ忽チ足  
ノ疾アリト稱シ城中ニ歸リテ此疾瘳治セスハ力ナ  
フベカラストテ轎ニ乘シテ回リケレハ漢南ノ兵モ一々  
同シク軍ヲ班シケル皆々王城ニ入ルヲ見テ柳成龍モ  
今ハ何如トモセンカタナフ獨リ是ヲ憂ヒセシガ成龍  
モ亦シレヨリハ疾ニ卧シテ引込ケリ是皆李如松ガ  
實ニ日本ノ還ル軍ヲ追トスルニ本ヨリ意ハナケレモ  
朝鮮人ヲ給ヒテ謾リニ言ヲ詫ケタリトハ見ヘニケ  
リ斯テ日本ノ人々ハ始メ王城ニ入リシ時トハ違ヒ諸  
將ノ意ニ懼ヲ懷キ若シ明人ノ後ヨリ喰トメ追ヒ討

ツコトモヤアランスカトカリニモ民家ニ入テ宿テシド  
ヲ取ルコトナク野陳ヲトツテ營陣ヲ備ヘ用心ヲカク  
見ヘケレバ後ヲフムベキヤウモナシ朝鮮ノ諸將ノ其  
途スジニ當リテ陳取ル輩モ日本ノ大將ノ油断セザ  
ルノ勢ニ憚レバ還テ左右ニ屏キカクレ敢テ止シント  
スル者モナシ日本ノ諸勢是ニ依テ思ノ外途中ノ  
憂モアラステ東海マデハ意ヤス夕引取リケリ  
斯テ日本勢海邊ニ退キ所ヲ分テ陳營ヲ結ビタルハ  
蔚山西生浦ニ始テ東萊金海熊川巨濟ニ至ルニテ  
其首尾相連ナツテ凡ソ十六營ノ屯ナリ山ニヨリ  
海ニ沿ヒ城ヲ築キ塹ヲ掘リ器械ヲ修理シ俵糧ヲ

譚へテ久ク留ル計ヲナシタリケル。兵部侍郎宋  
應昌ハ漸ク五月ノ季ニナツテ李如松ニ倭軍ヲ追  
討ベキ牌文ヲ出シタリ。日本人既ニ去ルコト數十  
日過タルニ何ヲ以テ如此ノ延引、挙動ヲナスト尋ヌ  
ルニ宋侍郎ハ人々己レガ日本兵ヲエルシテ追ガル莫  
ク議セラレシカト。其評判ヲハハカル故カリニ人数ヲ  
出サレムト雖モ其實ハ日本ノ武備ヲ恐ル、ガ故ニヨ  
ヨリ。遂ニ兵ヲ進メスシテ路ヨリゾ歸リケル。明ノ朝  
廷日本ノ兵軍多シテ其戰強ナリト報アルハ重テ  
泗川總兵劉綎ヲ大將トシ福建西蜀南變等ノ處々  
ノ兵士ヲ召シ幕リ其勢五千ヲ以テ繼ロテ出テ。星

引ハ苦ト云フ處ニ屯ヲナス。南將吳惟忠善山鳳溪  
ニ屯シ李寧祖承訓葛逢夏ハ居昌ニ屯ヲナス。駱尚志王  
必迪等ハ處州ニ屯ヲ止テ四面ノ方角ヲ環ラシ營ヲ備  
ヘテ互ニ陣ヲ相持テ兵ヲハ更ニ進メスナンヌ李如  
松ハ又沈惟敬ヲ使トシ往向テ日本ノ諸將ニ諭シテ  
海ヲ渡ラセ。又徐一貫謝用梓ヲシテ名護屋ニ遣シ  
大閣へ參會セシメントシタリケル。二日ニ日  
兩使來日本事  
日本ノ諸將既ニ師ヲ善山府。金山浦ノ地ニ班シテ大  
明國ノ使者ヲ待トコロニ既ニシテ沈惟敬徐一貫謝用  
梓等共ニ名護屋ニ打渡リテ。大閣へ其品々ノ贈リ

モノヲ季吉公悦ビ玉ヒ乃チ羽柴下總守勝雅ヲ徳川  
公ナラビニ利家ノ方ニ遣シ大明ノ兩使ヲ饗應モ  
玉フヘキ旨ヲ下サル依茲テ謝用梓龍岩ハ徳川公  
ノ陣營ニ入り來リ徐十貫ハ唯五ト号ス利家ノ陣營ニ入  
來ル日々ノ饗應美ヲ盡シテ五月廿二日ヨリ七月  
ノ初メニテ諸大名ニ仰付フレ日ヲ替月ヲ改メテサ  
ニクノ御馳走タリ其役付キニ出タリシ人々淺野彈  
正少弼太田和泉守建部壽徳小西如清近江國觀  
音寺某等ヲシテ替リニ大明兩使ノモテナシテ勤  
シメサセラフレタリケレハ各々時ノモテナシ他ニ劣ラ  
シトソ意ヲ盡サヌ人モナシ同廿三日秀吉公大明ノ

兩使ニ御對面アリテ御饗應ノ事アリ獻酬ノ御儀  
式モ畢リケレバ太カ一腰白銀千枚衣服二十襲夏  
衣三十領ヲ兩使ニ賜ヒ白銀二千枚金作ノ長刀一  
柄ヲ沉惟敬ニ賜ヒ白銀五百枚暑衣百領羽織百枚  
ヲ其歩從ニ賜ケリ名護屋ハモトヨリ其地風景氣  
宜シキ處ニシテ山聳ハ巖石サガニク岬曲タル海水久  
江アリ其周リ大凡百町ニア一リタル勝境ナリケレバ  
兩使ハ風興ノ常ナラザルヲ愛シテ各々詩ヲ作り  
テ其意ヲ抒タリケレバ秀吉公モ大ニ悦ビ玉ヒテイ  
テサラハ我ハ又明人ノ興ヲ促シテ其詠吟ヲ助ケント  
テ數百艘ノ船凡ヲ海上ニ漕キツテ子諸家ノ旗

幕船仰ハ南風ニ飄セバ黃頭三老槳ヲ動シ欸乃ヲ  
タヒツルレハ廣クトシタル海上ニテ數百ニアール舟子  
凡ソ高聲ナル其響キ雲ニ入波聲ニ和シテラビタ  
レ。秀吉公モ其ニ船中ニ入玉フ。其行粧最モ今日ノ晴  
ヲツクシテ美ヲカサリ。虎尾靴ノ鑢二百本。金造リ  
長刀數十柄舟ノ頭ニ森然ナリ。歩卒二百余人一様  
ニ茜染ノ羽織ヲ著シテ相從フ。秀吉公ハ舟中ニ於テ  
酒宴ヲ促シ又猿樂ヲ催サシメ。觀世金春ノ木夫等ヲ  
召レテ。一日ノ遊覽ヲ翫ヒ玉フニ兩使モ亦興ニ乘シテ  
其感スクナカラザリケリ翌日ニ至レバ秀吉公兩使  
ヲ召サレ茶ヲ賜フテ重テ丁寧ノ情ヲ盡シ玉ヒケル

斯テ兩使ハ歸朝ノ暇ヲ告ケ申スニ秀吉公書ヲ木  
明ニ投シ玉フ其趣ハ和親若シ僞ナクハ我モ亦何ゾ  
盟ヲ渝フヘキヤ然レバ大明皇帝ノ御女ヲ邀ヘテ本朝  
后妃ノ位ニ備フヘシ。兩國年來相敵ス故ニ久年勦合  
船ヲ贈ラス今若シ和乎ノ儀事成就セバ必ス是ヲ遣  
ハスベシ。和親終ルノ後兩國ノ權臣相互ニ誓言辭ヲ通  
ゼ。我去年ヨリ驍將數輩ヲ遣シ朝鮮ヲ征伐シ其  
郡邑ヲ平ケ其人民ヲ殺戮ス而主今貴國悉ク我言  
ヲ取ルナラハ朝鮮國ノ罪科ヲ願ス其八道ヲ割テ四  
道ヲ以テ李船ニ授ケ其余ノ四道ハ我ニ領スヘシ若  
四道ヲ彼ニ授ケナハ朝鮮ノ王子并ニ大臣一二人ヲ



レテ本朝ニ質タラレメシノ三貴國其コレヲ訝ル夏  
 ナカルハ去歲我將加藤主計頭清正朝鮮ノ王子  
 肆瑾二人ヲ活ナカラ擒ニセリサレテ沈惟敬蝦々ニ  
 コレヲ請ヒ求ム是故ニ今ニ子ヲ朝鮮ニ返レ遣ス處  
 ナリ我謂ラク朝鮮ノ權柄ヲトリ貴官ニアル臣等  
 數人ト世々我朝ニ叛クヘカラサル盟誓ヲ以テ其丹  
 誠ヲ顯ストキハ是可ケント認テ遣セハ謝用梓徐  
 一貴此書翰ヲ受トリテ歸國ヲコソハシタリケレ  
 朝鮮王子作詩事  
 同月秀吉公ハ内藤飛彈守藤原如安ヲ御使トシテ  
 小西行長増田長盛石田三成大谷吉隆ガ方ヘ書ヲ

馳テ朝鮮ニ王子ナラビニ從臣黃廷或黃赫等ヲ歸國セ  
 シメヌベキ由ヲ仰セ渡サレケルトナリ又福原右馬助熊谷  
 内藏允ヲ朝鮮國ニ遣ハサレ諸將ニ告ケ知ラセテ大友  
 義統カ今度朝鮮國平壤城ニ於テ小西カ急難ヲ救ハス  
 レテ怯弱ノ働キ在リシコト曾リ武門ノ汚レトシテ兩  
 國ノ會戰ニ日本國ノ辱ヲ殘セル等ノ箇条ヲ以テコレ  
 フ責玉ヲ又嶋津又七郎ガ同名兵庫頭ニ屬シナカラ  
 義弘カ下知ニ從ハサリシ夏ヲ尤メ玉ヒ其外波多三河守  
 カ鍋嶋直茂カ下知ニ背キ怯懦キ振廻アリシヲ怒リ  
 玉ヒテ遂ニ黒田長政ガ幕下ノ士トナシ僅ニ其命ヲ全  
 フスルノ身ノアリサニトハナリニケリ斯テ朝鮮ノ王

子ハ加藤清正カ手ノ掬入トナリ王ヒ憂ガ中ニモ年波  
 ノシハラクモ止マラデ。三年アミリノ夢ノ世ヲバ千年ヲ  
 フルガ如クニテ。過ギ迎ヘサセ玉ヒケルサレハ加藤清正  
 猛威アル武勇ノ男鬼ノヤウナル意ニモ情ノ深キ者ナリ  
 ケレバ平生ニ意ヲツケテ衣食等ノコトハ是ヲ云フニ及ぶ  
 四季折リフシノ慰メニテ陳中ノ課シキ中トハ云ヘドカタ  
 ノ如クニトリミカナフハ奇特ナリケル事ヒナリ一歳清  
 正カ橋中ノ後詰アリシトキ。二王子ヲバ直茂ニ預置タル  
 ニ直茂モ亦是ヲ憐ミ朝夕ニ意ヲ付ラレケル。有時陣中  
 ニ召具シタル是琢ト云ヘル禪僧ニ絶句ノ詩ヲ作ラセ  
 王子ニ是ヲ贈リケル。

可憐天上鳳凰兒 飛入鷄群失德儀  
 咸鏡蒙塵何似處 蝕非月耻是斯時  
 王子ハ是ヲ意アル慰ゾト感アリテ。即チ和韵ヲ作  
 タニフ

包羞忍耻是男兒 不恨君山鍛羽儀  
 玉帛明朝西塞曲 渭城香火共歸時

其後ハ王子モ意トケ。詩文贈答ノ事ナントニテ哀レキ  
 月日ヲ送ラレケル。然ルニ今度太閤ノ命ニヨリ。朝鮮ニ  
 歸ラレケルガ。多年ノ恩意ヲ清正方ヘ謝セントヤ思ハ  
 レケニ一封ノ書ヲ加藤右馬允清正ノ家臣カ方ニテ遣。其  
 意ヲ清正ニ達シ玉ヒケル。其趣ハ兩王子臨海順和

兩府並ニ倍臣長溪上洛護軍大將南兵使某等壬辰年ヨリ日本大將軍主計頭清正ニ擒ヘラレ既ニ城ニ入レトキ恩遇一コトニ不少一行ノ家人一テ并セテ衣糧ヲ給フ撫恤一ルコト至情ナルカナ又金山浦ニ至ルノ後関白殿下ノ命トシテ京城ニ放還サルノ慈惠佛ノ如シ真箇ノ日本中ノ好人ナリ況ヤ素聞ク關白殿下雄傑比ナキ故ナルカナ四隣皆畏之隣國ノ藥子庶官ヲ待ニ舊意ヲ存ジテ渡海ヲ哀ニ京ニ歸ラシム其恩ノ深キコト此海ニナンシ異ナラシ其敢テ忘ルノ期アラシヤナト書タリケル清正ハコノ書ヲ納テ長家ノ珍トシタリケル

日本軍兵重渡海事

此時秀吉公ヨリ重テ御下知アリ金山浦近隣ノ城々一人數クバリノ多少ニテ是ヲ仰出サレタリ先金山浦ノ本城ニハ羽柴安藝宰相秀元推木ノ端城二箇所其兵一方七千六十人ト聞ヘタリ熊川ニハ小早川隆景六千百人同城ノ端城ニハ久留目侍從四百人柳川侍從千百余人筑紫上野介三百余人高橋主膳二百九十人右ノ二箇所ニ籠ル所八千二百五十余人ト聞ヘケリ唐嶋ニハ蜂須賀阿波守四千五百人生駒雅樂頭二千四百人合テ此手ニ六千九百余人タリ同嶋ノ内一箇所ニ羽柴主佐侍從二千五百九十人福嶋左衛門大夫正則二千

五百人。丸田民少輔二千三百余人。合テ七千四百余人ナリ。加徳嶋二八九鬼大隅守八百三十余人。加藤左馬助三百十余人。菅平右衛門百余人。得居兄弟五百七十人。脇坂中務少輔九百人。合テ二千七百三十余人。一番ヲ相勤シハ藤堂佐渡守千四百七十余人。堀内安房守五百七十余人。秋若傳三郎百八十五人。乘山小藤太同小傳次五百余人ナリ。是ヲ合テ二千七百余人ニ番手ノカハリナリ。毛利壹岐守千六百七十人。高橋九郎七百余人。秋月三郎三百八十人。嶋津又七四百七十人。伊藤民部が七百人。此手合テ二千九百八十人ナリ。加藤主計六千七百九十人。本城一所ヲ相守リ。同ク端城ヲハ相良宮内少輔ト

合テ是ヲ守ル。嶋津薩摩侍從二千二百二十八人。黒田甲斐守五千八十人。鍋嶋加賀守七千六百四十人。三ノテ。各々本城一所ヲ守リ。鍋嶋ハ外ニ端城一所ヲ構テ。宗對馬侍從。端城一所。小西攝津守七千四百五十人。三ノテ。本城一所。松浦形ノ郷法印。宇久大和守。大村新八郎。端城以上三箇所ナリ。總數合テ十八箇所。其内本城十一箇所。端城ト稱スルハ小城ニシテ。其數七箇所ト聞ヘタリ。此ヲ守ルノ總人數合テ七万八千七百人トシルセルハ。文祿二年ノ著當ナリ。右城地所付ノ無キ分ハ。熊川ヨリ西ニ付テ時ニ宜キ要害ヲ見ハカテ。トノ命令ナリ。此亦秀吉公ハ黒田如水淺野彈正二人ヲシテ。朝鮮國

在陣ノ諸將ニ遣ル、ノ命ヲ承ケ。急キ出船ノ促サレ。其趣ハ前年諸將晋州城ヲ攻ムルト雖モ其城堅固ナルニ非ク更強シテ是ヲ下ス莫不能トカ是度ハ諸將均ク進ニテ晋州城ヲ攻破ルベシ。今ヤ淺野彈正黒田如水ヲ遣ス所ナリ。二人ニ對シテ各軍事ヲ相談スベシトノ事モナリ。彈正如水共ニ朝鮮ニ着岸アル増田石田大谷カ方へ書ヲ通シ。秀吉公ノ命ニ依テ只今渡海ノ旨ヲ傳フレバ。増田等はヲ聞ヨリモ先ツ二、三浮田秀家ノ陣屋ニ往テ是ヲ告ケタルニ彈正如水モ亦秀家ノ營ニ來リテ參會シ。秀吉公ノ命ヲ傳ヘテ旅館ニ歸ルト聞ユレハ。増田石田大谷カ秀吉ノ

命ヲ奉ラフシ其爲ニ淺野カ旅館ニ行タリケリ。折節如水ト彈正ハ圍碁ニ居タリシガ。征ヤ劫ヤ点ナンド碁ノ行ヲ争フテ餘念ヲ忘ル、時ナレハ三人ノ到來ヲモ更ニ知ラサル如クナリ。稍レハラク側ニ座セリト雖モ何ノ挨拶モ無キユヘニ石田ハ増田大谷口ニ目クハセシテソツト座ヲ立テ歸リケル。其後一畚ノ碁ノ黑白ヲ二二分テ始テコレニ意ツイテ三奉行ノ輩ハ何クヘゾト尋ヌルニ近習ノ者モハヤ御歸ト云フニ付テ先キヨリノ急ニ意ツキ早速ニ使者ヲ馳セ。再三及ト云ヘドモ三奉行ハ是ヲ含シテ敢テ歸ルベキノ所存モナク且ヘニ使者ヲ叱ツテ其我々ニ逢ハニヨリ碁聲下々

タルノ樂ニ過クヘカラスト云ステ、遂ニ顧ル意ハナレ  
彈正如水ノ二人ハ亦人口ノ笑ヒ嘲ラシ莫ヲ恐ルノ  
ミナラス秀吉公ノ怒ルニ逢ニス莫ニテヲ思ヒ面ヲス  
レヨリ。三人ノ者尼ニサシクノ謝ヲナレテ言ヲ云ヒ分ク  
ル下雖尼三奉行ツイニ相會スル古莫ナクテ止タレハ秀  
吉ノ命旨ヲ諸將數輩ニ通シテ二人ハ空レク歸  
朝アル其後ニ秀吉公ハコレヲ聞キ玉ヒ二人ノ怠慢無  
禮ナルヲ尤玉ヒケル依茲テ双方ノ意趣ヲ含メル長キ  
恨トナリニケリ

朝鮮軍記大全卷之二十二終

朝鮮軍記大全卷之二十三

朝鮮軍兵欲救晉州事

去年壬辰年日本諸將加藤遠江守長谷川藤五郎森  
常陸介等兵ヲ集メテ晉州城ヲ攻ムル處ニ牧使官金  
時敏ト云ヘル者禦之莫ノ緊キニヨリ日本勢モ意ヲツ  
クシテ攻ムルト雖尼遂ニ克ツコト叶ハスレテ軍ヲ退クル  
處ニ今度秀吉公ヨリ晉州ヲ攻メ落シテ後和議ノ事  
又調スヘレト下知アルニヨリ兼テハ小西ヲ始トシ三奉  
行等ニテ一同ニ和儀ヲ調フニ定メ置キタレ尼重テヨニ  
軍兵備ヘノ定メラバナレタリケル殊ニハ加藤清正ハ行長  
秀家三奉行ノ相談ニテ日本朝鮮兩國ノ和睦ノ事ヲ司

ドリサレモ粉骨ヲ盡シテ生捕タリレ二人ノ王子ヲ放チ  
回ラシムルヲ遺恨モヲルユヘ何トシテ此度ノ和儀ヲ破  
リナント思フ折カラ晋州城ヲ攻破リナシハ能キサニタ  
ケノ第一ナリト思ヒツレバ人ニスクレテ勇ミケリ加藤清  
正小西行長ハ前々ノ定ヌ相替ラヌ毛利秀元一方ニ向  
フ小早川隆景黒田長政淺野彈正伊達政宗等コレニ  
屬ス浮田秀家一方ニ向フ鳩津義弘鍋嶋直茂長曾我  
部元親蜂須賀家政立花宗茂等コレニ屬セリ凡軍兵  
六萬余人ノ暮當ナリ夫晋州ノ城タルヤ大江前ニ在リ  
三方ハ峻危ニシテ石壁聳ヘタルニ壁高ヌリアケ矢柵ヲ  
上ニツラ子構ス晋州今ノ牧使ハ徐元禮ト云フ者シテ

朝鮮ノ人數ニ萬余人此城ニ籠置タリレナリ朝鮮ノ諸  
老臣モ日本人南方晉列城ニ寄セ來ルヨシ聞ヘケハ連  
リニ諸方ニ旨ヲ下シ諸將ヲ督シテ倭人ノ兵ヲ追ヒ討  
ニ云都元帥金命元巡察使權慄以下ノ官義ノ兵士皆  
ス宜寧ノ地ニ相集リ軍評定シタリケル權慄ハ幸州ノ  
捷ルニ狙ツテ岐江ヲ渡リ前ニ進ニテ敵ヲ討ニト云ケ  
ルヲ郭再佑高彦伯是ヲ謀テ倭兵方ニ盛ニナリ我軍ハ  
又多クハ島合ノ兵ニシテ戰ニ堪タル者少ケレバ最モ覺  
束ナキコトナルニシテヤ糧米ノ儲モナシ輕クシク進  
ムヘキ度ニアラスト云フ爰ニ季薨ガ從事成好善下  
云ヘル者其意孩ニシテ事ヲ曉ラヌ男ナルカ辟日ヲ奮

テ諸將ノ逗留スルヲ責テ曰知此ノ油斷ニシテ何其  
歎ヨハ退クベキ我ハ權慄ノ議ニツカント慢リニ進ニテ  
江ヲ過ル斯テ馳行キ咸安ノ地ニ至レドモ城ハ皆日  
本ノ兵ニ掠ラレ空レキアト、ナリケレハ城内ヲ搜リ  
求メテモ糧餉ノ類ニ於テハ一物モ得ル處ナカリケリ  
依然テ諸軍中ニ食乏シクヤウクニ青柳ノ實ヲ摘  
ミ取テコレヲ食セル体ナレバ誰カ一人鬪ヲナサント  
云フノ意モナシ明日ニ至ツテ諜ノ者凡馳セ來リ倭  
軍ノ到ルコト最モ急ニ金海ヨリ大軍ヲ押來ルト  
云フ各々駭キ立テ一サニ咸安ヲ守ルヘシト云フアレ  
バ或ハ退ヒテ黔津ヲ守ラシナント、紛レカハシキ相談

ミテ更ニ決定セガリケリカ、ル處へ日本兵士ノ大勢  
砲ノ聲夥シク響クヲ聞テ人々洶懼ノ色ヲナシ爭  
テ城ヲ出テタルカアマリニツヨク懼ル、トテ咸安ノ  
甲橋ヨリ押合テ水ニ墮コ、ニテ死ニ及ベル者甚以テ  
多クケリ

晉州城合戰事

朝鮮ノ兵將其稍クニ黔津ニ還リ日本勢ヲ望見レハ  
陸ニハ戈示鐵馬ヲ連テ旌旗ノ影雲ニ飄シテ寄セ來  
レバ水ニハ艤舳ヲ並ヘ楫槳シキリニ波濤ヲ押切テワ  
レヲトラテ潛テ近ク其大兵ノ有サハ野ヲ蔽ヒ  
川ヲ塞ヒテ攻メ寄ル勢ヒアリ朝鮮ノ諸將凡ハ



仰天ノ有様ニテ爰又散亂シテ逃レ行ク權慄人命  
 元李賞崔遠等ハ先テ全羅道ニ向ケレバ金千鎰崔  
 慶會黃進等晋州城ニ引ケル日本兵將透ク入ラ  
 ゼ攻圍ム牧使徐禮元判官成守璟等此時二將  
 ヲ待承ヘキノ爲メ久シク尚列ニ居タリシカ吾方列  
 ノ敵急ナリト聞クヨリ取ル物モ取アヘズ狼狽テ還  
 リケリ徐元禮此處ノ牧使トナツテ纔ニ二月ノ間  
 ナリ列城ノ本ノ古城ハ山上ニアリタリケリ此ノ處四  
 面ニ山巒テ險阻ノ要害最スグレタル處ナリシテ至  
 辰ノ年倭兵ヲ防ク用心トシテ處々ノ城地修理造  
 作ノ有リシ時此城ヲモ東面ニ移シテ平地ニ就ク於

是テ日本勢ノ寄手ヨリ城樓ヲ八處ニ組上付シテ城中ノ  
 有様ヲ瞰ミ又城外ノ近林ニ人歩ヲ走セ竹林ヲ仰リ取  
 リ竹束ニ造リ立テ是ヲ城邊ニ押環シ其陰ニ身ヲ蔽  
 ヒ敵ヨリ射出ス矢先ヲ防キ其内ヨリ鳥銃ヲ發テ元王  
 ノ飛テ敵城ニ落ルモハサナカラ雨ノ如ナリ此ニヨツテ城  
 中ヨリ敢テ頭ヲ指出ス者モナシ又千鎰カ率ビタル兵卒  
 ハ皆々京城ノ市店ニ集ル町人バテ利ヲ以テ募アリニ  
 應スル輩ナレハ戰鬪ノスベヲモ知ラズ又千鎰モ兵事  
 未練ノ男ニシテ謀ヲナシ人ヲ用ユル謀計モナケレバ自  
 ラ下人ニシテ喜ヲサントスル者ナリ殊更ニ牧使徐  
 元禮ト相惡ニテ中ヨカラス主客互ニ相猜ヒ號令モ

爰ニ乘<sup>ル</sup>一<sup>ツ</sup>違<sup>フ</sup>ニヨリ是ガ賊ノ本トナル惟リ黃進十  
云ヘル將東城ヲ守テ居タリシカ士卒ヲ勵<sup>シ</sup>意ヲ盡  
シテ又戰フ是ニ依リテ數日ノ間敵ヨリ打出ス鳥銃ニ  
アタリテ死セル者此手ニ最モ多カリケレバ軍人今  
ハ氣ヲ奪ハレテ防キカ子テノ見ヘニケル此手ニ向テ寄  
手ノ大將ハ田秀家ノ人數ト聞ヘタリ秀元ハ西ニ  
向ヒ加藤小西黒田淺野ノ諸將ハ皆城ノ南面ニ向ヒタリ  
寄手ノ方ニモ此城ニ度ニテ攻メクニズ秀主<sup>ト</sup>公ノ震怒  
ノ少カラザラン度ヲ恐レ赤ハ前度ノ耻辱ヲ思ヘ諸軍  
必死ノ意トナツテサレノ攻具ヲトメ或ハ梯<sup>ハ</sup>塔<sup>ニ</sup>  
或ハ連<sup>テ</sup>楯<sup>ヲ</sup>竹<sup>ヲ</sup>束<sup>テ</sup>熊<sup>手</sup>ノ類ニテ盡ク調ヘ備スト云フコト

ナク諸手一同ニ意合セ攻メツレト城内モ亦防キ宜シク  
日本城蟻ノ如クニ壁ニ附テ城中ニ入ントスル城内ヨリ  
投石射ヲ發シカラ極メテ是ヲ禦ケバ流石ニ小西黒田毛利  
ガ等ノ勇將立モ少シク攻メクニテ持口ヲ却ケントシタリ  
ケル此時ニ總兵官劉継ハ晉州危シト聞ヨリ八苦ヨリ  
馳テステニ陝州ノ地ニ入ラントシ吳惟忠モ鳳溪ヨリ草  
溪ニ至リ以テ右道ヲ守ラントス寄手ノ諸將モ今ハ輒  
ク此城又拔キ難カラシカト思惟ニワタリ評議モ既ニ  
區々ナラントシタリケル  
清正作<sup>ル</sup>鞆<sup>ノ</sup>韞<sup>ヲ</sup>車<sup>ノ</sup>事  
爰ニ加藤清正ハ小西石田カ和儀ノコト是非ニ破ラント

思フ意ノツヨキヨリ何如シテカ此城ヲ攻落シテカナト  
首ベテ頃々思惟シケルカ能キ手立コソ有ルナレト  
數百枚ノ牛ノ革ヲアツメ亀甲ト云物ヲ造リ出セリ  
是ノ贖韞車ト云フモノナリ異朝ニ古ヨリ是アリテ  
用來レル軍器ナレモ本朝イニタ此頃ハ其制作ヲ知サリ  
シヲ清正初メテエミナシ其下ニ多ク足輕ヲ入置キ四  
足ニ車ヲシカケヒシクト敵城ノ槽下ニテヲシ付テ金手  
子ヲ入レ大錠ヲ遣ヒテ石垣ノ角石ヲコチハ子テ堀カヘ  
ス生牛ノ皮ヲ以テ夫夫ニ屋ノ甲ヲ張リ日ニ乾カタメ  
タル支ナレハ石ヲ投テモ通ラス火炮ノアタルモカニヒナ  
シニシテヤ半弓ノ矢ノ根ナンドノ透ルヘキ事ニアラズ子ハ

内ニ在リツル足輕在何ノ恐レモアラズシテ自由ヲ傳  
キホリケレハ暫時ノ間ニ城ノ隅ナル木石ヌケハ九間  
ノ其際クハラノト崩レケル折フレ雨ノツヨカリケレハ  
城ノ内ノ者在ハ雨ノツヨキニ土濕ヒ石ヌケタリト思  
ヒケルニマ菰ヲ束テ鐵路ヲサギ石ヲ投シテ敵ヲ入レ  
ト防キケルステニ石垣ノツルト見ルヨリ加藤が軍ヨ  
リ森本某レ晉刻城ノ一番衆リ後日ノ證據ニ立玉  
ヘト隣ニ備ヘレ黒田カ陣ニ言葉ヲカハレテ城ノ破ヨ  
リ壁壘ヲ棄ラントスルヲ内ニヒカヘレ成守環士卒ニ  
下知ニテ鉄炮ヲ發スレニ近々ト寄來ル森本儀太夫  
向フ髓ヲ打ヌケハ何かハ以テタマルヘキ城ヨリ外ニ打

明洋軍紀大卷之三

落ヤレ痛手ヲ負フテカ、リ得ズ最前ニ森本カ黒田カ  
陳ニ言葉ヲカケシ其時ノ士ハ後藤又兵衛ナリケルカ  
森本ニ言葉ヲカケフレ是ハ無念トツヒテ棄込ム後ニ  
ツ、クハ奉董ノ堀久七ト名乗テ上ルニ番ニツ、ケルハ  
加藤清正ノ手ノ者ニ飯由角兵衛ト云フ者ナリ角兵  
衛ハ先ニ棄込ム後藤カ具足ノ上帯トツテ引ス（御邊  
一番ノリト申スヘキヤ先驅ハハ此方ニ在モノヲト云  
フ間モナク清正ノ相印妙法ノ旗ヲ指上ケ清正カ家  
子飯由某ト番ノリト名乗リケリ後藤ハ是ヲ腹立  
一番棄ハ黒田カ手ノ者後藤又兵衛掘某ト名乗リテ  
コレモ繼テカケ登ルニ飯由ハヤク敵兵ト戦テ既ニ首一

ツ取タリケリ是ヲ見ルヨリ加藤カ手ノ者加藤清兵  
大脇次郎左衛門久保吉右衛門小代吉村柏原三宅赤屋庄  
林ヲ初トシ我劣ラレト棄込ケル千鎰軍兵北門ヲ守リ  
テ居タルカ此有様ヲハルカニ見ルヨリ城ハ早ヤ陥リヌ  
ト意得テ敵モミタ來ラヌニ我先ニト潰レ立日本ノ諸  
勢山上ニ打登テ城兵ノ潰ト見ヨリ總軍ノ兵士トモ  
一度ニ喊ノ聲ヲ上ケワツトヲメイテ切入リケリ千  
鎰ハ轟石樓ノ上ニ在テ雀慶會ト共ニ詠テ居タリ  
ニカ此体ヲ見ルヨリ憤ノ涙袂ヲ潤レ今ハ是ニテト  
ヤ思ヒ定ケシ雀慶會ト共ニ手ヲ携テ海ニ望ニテ  
身ヲ投シ底ノ水クツトナリニケル牧使徐禮元成

牛環等アリニツヨク働キテ其身モ數多所手負ケ  
レハ林藪ニ暫ク隠シテ居タリシヲ秀家カ家臣園木  
權之丞コレヲ搜シテ其首ヲハ切タリケル此後加藤黑  
田ノ兩人一番乗ヲ論シモ遂ニ加藤カ一番乗リニハ定  
リケリ秀吉公此時ニ牧使カ首キツテ見セヨトアリ  
シハ前ノ牧使金時敏カ先年此城ヲ克ク防キ味方ノ  
後レヲ取シ故ヘナリ此度ノ牧使官ハ徐元禮ニテ有  
ルナレハ其人ニハ違ヒタリサレハ此首ヲ生捕ノ者ニ  
牧使或牧司或牧使トアル本皆非ナリ官人ニ疑ナシト云ヘルニヨリ是ニヨツテ  
徐元禮カ首ヲ塩淹トナシ名護屋ニテ送り遣シケ  
ルヲ秀吉公ハ大ニ是ヲ悦氣アリケルナリ朝鮮ノ大將

ノ討死シタル者ハ牧使官徐禮元判官成守環倡義使  
金千鎰本道慶尚兵使崔慶會忠清道ノ兵使官黃進  
義兵復讎將高從厚等ヲ始トシ軍官民卒ノ死スル  
者凡六萬余人牛馬雞犬ト雖凡是ヲ遺サズ盡ク殺  
ケリ其ニテモナヲ飽タラスヤ思ヒケン城ヲ夷ラゲ壕  
ヲ填メ井ニ埋メ木ヲ刊テ前度ノ憤リヲ發シケルコノ  
時六月二十八日ノ夜ナリケリ此度落城ノ時ニ至テ最  
前ニ城ニ入タルハ加藤小西黑田其功勞何モ同シト雖凡  
清正城面ノ高櫓ヲ破リタルニヨリ城中大ニ亂立テ遂  
ニ落城ニ及ヒケル故清正ヲ以テ第一ノ功ト定メラル  
又伊達政宗小勢ヲ以テ渡海ヲナシ軍忠ヲ竭スノ

条神妙ノ至リナリトテ秀吉公大ニ是ヲ賞シ感狀  
ヲ賜ヒケル又秀元が大兵ヲ率テ西門ヨリ急ニ攻テ入  
リケル故撃取ル所ノ首數ハ此手ヲ以テ第一ト定メ  
ラル日本勢朝鮮ヲ討伐ノ戰初テヨリ朝鮮人ノ討  
タル、莫此度ノ闘ヲ以テ第一トコソ知レケレ朝鮮王  
李貽モ亦今度討死ノ諸將ニ盡ク贈官ヲナレタリ  
ケル

朝鮮軍記大全卷之二十三終

朝鮮軍記大全卷之四

自文祿二年七月至同四年八月迄

沈惟敬再議和睦事

朝鮮國王未ダ義州ノ地ニ在リケレバステニ王城ヘモ  
還リ入ランカナ下。旅裝ノ支度モ有ナトスル時ニ  
當リ。晋州ノ城ヲ陷レイルト聞ヘケバ李貽大ニ驚  
キ恐レ大明ノ諸大將ヘモ急ヲ訴ヘ又明ノ都城ヘモ  
此莫ヲ告タリケル此時明將ノ朝鮮ニ在ル者ハ呂  
惟忠ハ善山府ニアリ。劉綎ハ大丘府ニアリ。駱尚志王  
必連ハ處州ニ在テ要害ヲトリ堅メ李如松提督ハ  
王城ニゾ在リケル。明將共晋州城陷ルト聞ヨリ陝川草  
溪等ノ所ニ馳セテ以テ右道ヲ防テ再ビ王城ニ入ラセ

レトソレタリケル。サレド日本ノ諸將モトヨリ外ノ願  
ニアラス。晋州ヲ破ルノ後、釜山ニ歸リ。大明和ヲナスノ  
返事ヲ一子。日本へ軍ヲバ引取ヘシト云ヒ觸レケル。李  
如松ハ日本ヨリ晋州ヲ陷レタルト聞ケレバ、惟敬カ  
和儀ノ實ナラサルヲ責メトカメケルニヨツテ、惟敬ハ小  
西カ館ニ往テ約束ノ違タリト恨ルニ、小西ハ返テ惟敬  
ヲ怒リ、休和儀ヲ調フト雖モ、大明ノ兵日々ニ朝鮮ニ  
入ル。是何ゾ我ヲ誘ケルゾト責ケルガ事如此ノ次第ニ  
テハ、小西飛彈守ヲモ大明ニ遣スニ、レト子タリケル。  
惟敬ハ是ヲ最モナリト思ヒケレバ立歸リテ、明將共  
ニ此趣キヲ告ケ諭セシモ、明ノ諸將ハコレニ答テ君命

アツカ兵ヲ出シ、倭兵ヲ黜セシノ命ハアレモ未タ軍  
ヲ班スベキノ令ヲ聞カ子ハ私ニ、二回レ難レト答フ。惟  
敬令ハ奏スベキヤウナク飛脚ヲ以テ石司馬ニコレヲ  
報ス。石司馬モトヨリ和儀ノ張本トシテ、惟敬ト同  
腹ノ志アルモノユヘ事能様ニコレラヘナシテ、李如松  
等カ軍ヲ班スベキヨレヲ、兵部右侍郎宋應昌カ經  
略使トシテ朝鮮ニ在リケル方ヘ云ヒ遣リケル。李如  
松ハモトヨリ歸國ノ望ニ深カリケル故、九月ノ内ニ引  
除ラツテ王城守ル兵士在ラ段々ニ退カシム。其ヨリレ  
テ沈惟敬、和睦ノ良ヲ成就セントテ、倭軍將小西  
行長カ家門小西飛彈守藤原如安或内藤飛彈云  
太閤ノ使節ナリト

朝鮮軍紀大全卷五十四

三

同道ミテ関白秀吉ノ大明ノ朝廷へ降参ヲ納ル、處ノ  
表狀ヲナリ持セ大明國へ行タリケリ。曾ヨリ是ハ太  
閤ノ命ヲナセルノ狀ニハアラス。小西ハ元來倭智ノ  
多キ男ナル故。太閤ノ意ヲ起シ無益ノ征伐コレ有リ  
テ。危クモ異國ニ長陣スルコト是願ハサル處ナリサ  
ラハ國ノ長臣トシテコレヲ諫ムル志モナケレハ。面前ハ  
倭言ヲ以テ全キヲアサムキカナタ此方トコレラハ。父ルニ  
折カラ又同心ノ小人沈惟敬カ偶來リ。数多ノ賄  
賂ヲニ奉行ヨリ行長等ニテコレヲ典ヘテ偏ニ和議ノ  
全クナランコトヲ繕ヒテ自己ガ功ヲ起テ各聞ヲナサ  
ニ。欲スルニ小西等ハ又願フ處ノ幸ナリト。是ニ與ニ

レテ惡キコトヲハ善ナルヤウニ取カクシ。免ニ毛角ニ  
モ和睦ノ儀ヲソ巧ニケル李如松ガ王城ヲ出テ明ニ歸  
ルノ議ヲ定メテス。テニ軍ヲ退クルニ日本ノ兵將ナラシ  
山浦ニ充滿スルヲ朝鮮ノ人心大ニ恐レ金侍郎ト云ル  
者一絶ノ詩ヲ贈リテ曰。

聞説將軍捲甲還定知和伐是非間朝廷若有班  
師命不獨唇亡齒亦寒ト作りテゾ贈リケル此ノ詩ノ  
意ハ將軍提督ノ今軍兵ヲ引ツレテ御還アルノ由ヲ承ル  
定テ日本ト和睦スルノ理ト。彼ノ兵將ヲ討退クルノ是  
非ニ於テハ申サストテモ合点ノ一ハナルベキガ。若レ只今朝  
廷ノ勅定トテ護ニ軍ヲ班レテ。明國ニカヘラセ玉ハ。後ツケ

朝鮮軍紀大卷第四



元。日本ノ兵不意ヲ討チ朝鮮ヲ亡サバ大明ト申ス凡ヨ  
モ安穩ニハアルベカラスコレヲ他ノ口ニタトフレバ唇ト齒  
ト云フモノ常ハ覆ラザルモノヤウナレド唇ノ無キトキ  
齒ニ風レミテ寒如シ朝鮮ヲ唇ニタトヘ大明ヲ齒ニタトヘテ  
其難ノ退ナカラシコトニタトヘヲトリタルナリ。沈惟敬ハ如松  
カ明ニ歸ルノ時諸ノ貨物ニ花布四十摺ヲ小西行長ニ贈  
リ。其外日本人ノ求メニ依ツテ書籍ヲ多クコレヲ贈リ。其  
替トレテ日本ノ旗五本ヲモラヒタルヲ。潛ニ隱スト云フコ  
トヲ告ゲ知ラスル者ノ有故ニ李如松大ニ怒リヲ發シ  
彼者ヲ助ケ置ナラバ遂ニハ倭人ノ為反間ヲナスベキ奴  
ナリ。即チ囚ラステ殺サント思ヘ凡石星ガトリモテル者ナ

ル故アリレク當ラバ後難モ何如シト。妄ニ誅スルコト  
モカサハスレテ儲ゾサタナク止ニケル。

大明諸將還西事

沈惟敬区アニ小西飛彈守。藤原如安ヲ同道ニテ明ノ  
朝廷ニ歸至ルト雖凡明朝ノ諸臣評議シテ此度ヲ降  
表ハ是太閤ノ意ニ非スレテ。其臣ノカニヘコレラユルト  
云フコトヲ察スルニ其上又惟敬ガ歸至ルト未ダ其  
間モ遠カラザルニ早ク晋州城ヲ陷イル度アルハ最  
中國ヲ慕フノ志其誠ヨリ發スルニアラスト尤メテ。小  
西飛彈守ヲバ猶遼東ニ留メ置キ。其返事ヲモ淹々  
滯メテコレヲ不通。此時ステニ李如松提督ハ明朝ニ歸

國レタリケリ。惟リ劉綎。吳惟忠。王必迪等万余兵  
ハ昔ノ地ニ留リタルカ。朝鮮大ニ國荒人空ク食スル者ハ  
多シテ。運漕兵糧米ニ困レムコト殊ニ以テスクナカ  
ラス。老翁ハ溝ニ轉ヒ壯ナル者ハ辱ラ忘レテ。盜賊ノ伴  
トナルニ又重ヌルニ疫癘ヲ以テスレハ。於茲テ里民盡  
ク死亡トナツテ殆シト盡ルニ至ラントス。父子夫婦ノ  
愛モナク人々相食レ野外ニ暴セル骸骨ノ草莽ニ乱  
卧タルハ。目モアテラレ又有様ナリ。劉綎ハ八昔ヨリ南  
原ニ移リ又南原ヨリ都城ニ還リ。留ルコト十余日ハ  
カリレツルガ次第トス。西ニ還リテ朝鮮ヲ援フノ  
兵ナキニ處ク。日本勢ハ猶未夕船ヲ海上ニ浮メテ歸

國スヘキノ様モ見ヘ子バ。朝鮮ノ人心上下益ス恐レヲナ  
シ。日本勢ノハカラスモ此際ヲ窺テ襲來ラバ如何ナル憂  
目ヲ見シツラシト歎カヌ者ハナカリケリ。

黒田淺野等異見事

同八月秀吉ハ書ヲ浮田秀家毛利秀元等ニ賜ヒ朝  
鮮在陣ノ諸將ヲ勞ヒ且又其怠倦ノ意ヲ勵シ賜ヒ  
ル。其趣キニ兵器粟米塩醬等ハ増田右衛門尉早川  
主馬頭ニ問計テコレヲ倉庫ニ藏ムベシ炭薪等ノ物ハ  
其地山多ク深ケレハ斬艾テ城中ニ積ミ其上ヲ泥ニ  
テヌルベシ寒。到ラハ圍炉ヲ歩卒ノ類ニテ興フベシ寒疾  
ヲ得セシムヘカラス。篤人常ニ舟中ニ在ルナレバ其寒疾

ヲ得ンコトハ必定セリ。若シ用アラハ別ニ小屋ヲ造リ  
テ此者凡ヲコレニ居シムヘシ。若シ無用ノ者ヲハ先ツ本  
國ニ歸ラシメテ來春速ニコレヲ名ブベシ。普請ノ事終ハ  
山木ヲ斬伐ツテ城内ニ委積シコトモ又可カルベシ。大雪  
若シ降ラハ山木ヲ伐ルニ於テ其難カラシカ其為ナリト  
認テ飛脚以テ通セシム。又同九月ニモナリケルニテ  
大明和睦ノ返報未タコレ有ラサルニヨリ。秀吉公ハ又  
書ヲ朝鮮在陣ノ諸將ニ遣シ玉ヒ。諸陣屋ノ普請修  
理シ弛緊シクコレヲ守ルベシ。凡大明和謀ノ事ハ我コ  
レヲ推量スルニ偽ノ議タラシト思ヘリ。和議ノ事ニ欺レテ  
惰リ倦ムコト有ルベカラス。吾ニサニ復夕援兵ヲ遣レテ

悉ク朝鮮ヲ平ゲナント思ヘリ。然凡大明若シ交和人  
アラバソレハ時ノ宜シキニ相隨フベキコトナリト命ヌ加ヘ  
モヒケル又或日名護屋ニ於テ利家等ノ老臣太閤ノ御  
前ニアツニリテ軍議ヲナシサタムルニ黒田如水ハ垣  
ヲ隔テ聞之。即チ其座ニ入りテ去年大軍ヲ朝鮮  
ニ遣シ玉フトキ利家等ノ諸大老ノ内師ヲ督レテ渡  
海アラハ諸法度軍令ニ至ルニテ滯ルコト無ラン者ナ  
リレ。若シ然ラズハ軍ノ道ヲ知リタラシ我如キノ者ヲ遣  
リタラバ朝鮮ノ征伐何ノ難キコトカ有ルベカラス。今清  
正行長等唯ニ武勇ノミヲ出セバ善シト意得テ諸ノ  
軍更ヲ剛強ニシテ取リサバキ殊ニハ彼等カ年尚ニ壯

ニナルニヨツテ其心物ヲトニ練習ハス其上ニ清正行  
長其中善カラズレテ。清正法ヲ出セハ行長コレヲ破  
リ行長令ヲ下セハ清正コレヲ用ヒズ是故ニ朝鮮ノ  
人民何ノ法ニ依リ憑テ更テ定メシヤソモナク。遂ニ  
山林ニ遁カクレテ薄ク如クカナタ此方トヨルヘラモ  
定メヌカ却テ今ノ益ナリトスレハ土著ノ思ヲナス  
コトナレ。是以テ日本人ノ手ニ入レテ往來シ經テ  
ル處ノ二道ニ室ニ人ノ住メルナキユヘ里アリ田畠ク  
赤地トナツテ野外ニ青草ノタクヒテ罄盡タリ此ニヨ  
ツテ在陳ノ諸將其旅館ニアハル困勞ニコトニ以テ  
推察アルベキ莫ナリト云ヘハ秀吉公打テ熊首テ

朝鮮軍言ハズカ

謂タニラ實ニ郷カ言ノ如シ。師ヲ外ニ羸シ入其勢屈  
レバ内ノミダレノ有シト尤危キコトナリ。故ニ諸大  
老利家氏郷淺野長政ヲ招キテ秀吉公ノタニワ  
ヤウ。金山浦ノ諸將懐土ノ意アツテ進ムルノ氣ナレ。  
我自ラ師ヲ帥ヒテ朝鮮ヲ征センハ。水陸軍兵早ク  
コレヲ驅リ催レテ軍列ヲトシフベレ日本ヲハ得川公  
ニ附ケ申セバ。我今意ヲ勞スルノ儀更ニナシ。我ハ軍十方  
兵ヲ督レ。利家ヲ以テ左陣トナシ氏郷ヲ右陣トナ  
シ谷々十萬ツノ兵ヲ率ヒシメハ凡テコレニ十萬人  
ノ兵ナラン。軍馬ノ叫聲野ニ雷ヲナレ。隊旗ノ飄影天  
ヲ翳ヒテ。三韓ヲ過キ通テ直ニ大明ニ入ナラバ何ノ

朝鮮軍言ハズカ

難キトコロカアラシカクテ盡ク明兵ヲ屠ツク我遂  
ニ太明皇帝ト仰カレシツルコト最モ意地ヨキ夏ナラ  
ントアル其時 徳川公大ニ憤怒ミレク吾何ゾ日  
本ニ留守タラシ 縦へ何如ナル仰アリ氏我モ亦渡海  
セシノミトアリケル御顔色ノ宜カラヌヲ窺ヒ淺野進  
ンテ言ヲナスコトニ狐ノ妖ヲナレ時ニ應ジテ入タズ  
カスコト我久シク是ヲ聞ト雖氏見ルコトハ今始テ見  
タルカナ秀吉公ノ御意ニハ恐クハ狐媚入りカハツテ  
只今ノ御辞ヲ出シ玉フナランカト云へハ秀吉公ハ聞玉ヒ  
怒レル髮直ニ上リテ意ナシ手彈正小堅子メ何ソ言  
ノ無礼ナルトテ刀ノ柄ニ手ヲカケ玉フヲ利家氏郷コ

ヒヲ抱イダキトメテ曰彈正ハ我輩誅之豈ユ君ノ双ヲ  
汚ガレモフニ至ラレモノト制レトムレハ彈正アヘテコレ  
ヲ懼レス我輩數百人誅ニ伏スト云フトモ必スレモ憂  
トスルニハ不足カ抑近年大軍ヲ朝鮮ニ遣シ玉ハンガ  
為家ゴトニ三人アル所ヨリハ一人ノ軍役ニトツテコレ  
ヲ遣スニヨリ今日日本ノ軍兵ノ朝鮮ニ渡レル者半ニ  
過タリ又轉漕ノ費幾クトカ思名ス秀吉公今日御  
船ヲ發シ玉ハ明日ハ早ク郡盜ノ起レル蟻ノ如クニ同  
マリ乱テ構フル者モ又次テアラシコトニ疑オキ  
コトナリト理リヲ述ルニ秀吉公一端ハ大ニ立腹アリト  
雖氏折カラ肥後ノ熊本ニテ薩摩人梅北ト云へル者

一揆ヲ起スコトアルニヨリ。彈正息左京大夫幸長ヲ  
大將トシ梅北ヲ討伐アルニ付テ彈正ヲ召シ秀吉公  
ノ御氣色ヨロシクナリケルニヨツテ。彈正モ亦大ニ喜  
ビケルトナリ。

朝鮮王還王城并大明改經畧使夏  
同十月朝鮮王李昭ハ日本勢モ既ニ金山浦ニ引退  
キ李如松等モ王城ヲ明ケ軍兵ヲ引テ明朝へ還リ  
ケルニヨリ乃チ義州ノ地ヨリ王城ニ歸府ニシケル  
同十二月ニハ大明國ノ使節トシテ。行人司憲モノト  
モハ朝鮮國ニ入り來ル。此時ニ日本ノ兵將約束ニヨツ  
テ金山浦ニテ退クト雖モ猶朝鮮ノ地ヲ離レズ船ヲ

海ニシテ子晉州城ヲ陷イルノ事。皆其和睦ノ約束  
正レカラサル故ナリ。是畢竟レテ宗應昌カ經畧使  
トシテ其政法直ナラザルカ令ムルトコロナリト宗應  
昌ニ科メカリテコレガ任ヲ止ラレ。新ニ經畧使顧養  
謙ト云ヘル者コレニ代ツテ遼東ニテ來リ其參將胡澤ヲ  
王城ニ遣レ朝鮮王ヲ始トシ諸臣ニテニ告ケ諭セ凡其  
畧ニ曰倭人無端レテ爾カ國ヲ侵ス勢ヒハコトニ破竹ノ  
如ク王京開城ノニ都會ニ據フテ爾カ土地ノ人民多有  
ツコトナシレテ其八九ナリ刺ヘ爾チカ王子陪臣ニテ  
虜ニスト聞レ各ニヨリテ。自王上大ニ怒セ至ヒ師ヲ起シ一  
戰レテ平壤ノ倭兵ヲ破リ地ヲ復ヘレ開城ヲ得タリ倭人

竟ニ王京ヲ遁シ。王子陪臣ヲ送り還ス。復地二千余里ナリ。依茲中國所費ノ帑金不貲。士馬ノ物故モ亦不尠。カ朝廷ノ附屬ノ國ヲ待ツコトヲ恩義ニコトシ。此ニ止ル。皇上極リ大キノ恩亦已ニ過タリ。今餉スデニ再ヒ運ス。カラス兵士也。三再ニ用ユヘカラス。倭奴モ亦威ヲ畏レテ降ヲ請フ。且ニ夕封貢ヲ乞ナリ。天朝正ニ宜ク。此カ封貢ヲ容テ外臣トナシ。倭人ヲ驅リテ盡ク渡海セシメ。爾カ境ヲ侵ス。トワタヒ為シムヘカラス。禁シテ解キ兵ヲ息ム。必以テ爾カ國久遠ニス。キノ計ナリ。今爾カ國糧盡キ。人民相食ノ窮ナルニ至リ。又何ヲ恃ニテカ兵師ヲ請フニ至レルヤ。既ニ爾カ國ニ兵餉ヲモ與シ。倭

國ニモ亦封貢ヲ絶ナラハ。倭奴必ズ怒リ。爾カ國ニ發シ。爾カ國必ス亡ン。早ク自ラノ為計サルヤ。昔レ勾踐カ會稽ニ困レ。トキ身且異國ノ臣トナリ。妻且異國ノ妾トナル。況ヤ倭奴ノ爲ニカレラ。中國ニ乞フニ。臣妾タフレメンコトヲ成シ。以テ自ラノ憂ヲ寛フレテ。徐カニコレガ圖ヲナサンハ。是勾踐カ君臣ノ謀ニハ。ミサラスヤナド。委曲千百ノ語言ヲツラ子タルコレ沈惟敬等ガ偽リ。フコシラヘ倭國中國ニ入ツテ。臣タランコトノ取次ヲ朝鮮國ニ乞ヘ。氏朝鮮コレヲトリモタス。是ヲ怒ツテ日本ヨリ朝鮮ヲバ攻タルナリ。只今中國ヨリ日本ノ望ニ任セテ。日本王ノ封号ヲ免サレ。年々

貢モノヲ献スルコトヲ仰セ付ラレハ此和睦ハ事ナラン  
ト太閤ノ御意ヲ反復シテ言ヒ觸スニヨリ如所  
見ヘタルナリ朝澤王城ニ至ツテ旅館ニ在コト二月餘  
リナレバ朝鮮ノ評議サラニ決セズ李昭モ最モ難  
義ニコレヲ思ハルニ抑成龍ハ時ニ病ヲ以テ家居レタ  
ルガ啓状ヲ奏シテ曰惟當ニ評議ニ近日倭人ノ夏ノ情  
ヲ興ヘテ奏聞シ免角ハ中朝大明ヲノ仕方ニ任セタ  
ミヲヨリ外アルヘカラスト申スニヨリ即チ此議ニ  
決シテ朝鮮王李昭ヨリ大明ヘ返奏ヲハナレタリ  
ケリ爰顧養謙ハ朝鮮ノ經畧使トナツテ此處ニ來リ  
朝鮮人ノ述ルトコロ惟敬カ談ハ聞カ子氏日本ヨリ降ラ

乞ト云ヘル儀ト朝鮮和議ヲトリアツカフト云ヘル議ト  
大ニ相違アル上ニ明澤ガ方ヨリ見セ示レタル行長玄  
蘇ガ前々ヨリ朝鮮へ通スル趣ノ不同ナルニ猶以テ降  
ト和睦ト黑白ノ次第アレバ顧養謙ハ疏ヲ上リテ委  
曲ニ此議ヲ申シ上ルニ朝廷ノ聞ク處大ニ違フノ旨ヲ  
下シテ評定アルニ徐貫謝用梓等モ惟敬等カ賄ヲ  
受クルニヨツテ言ヲ曲ケテコレヲ論レ石司馬ニ荷儻スル  
ニ遂ニ顧養謙モ亦其任ニ叶ハストシテ新經畧使孫  
鑛ヲ以テ朝鮮ニ趣シメ顧經畧ハ替ラレケリ

朝鮮軍記大全卷九四 終

朝鮮軍記大全卷九四

十二



